

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 9 月 2 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370592

研究課題名(和文) 留学中の第二言語習得とアイデンティティ：映像ナラティブアプローチの構築に向けて

研究課題名(英文) Second language identity in study abroad: Developing a visual narrative approach

研究代表者

海野 多枝 (Umino, Tae)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：00251562

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究のねらいは、第二言語学習者が留学中に撮影した写真資料とライフストーリーインタビューデータの分析を通じて、留学中の第二言語アイデンティティの変容について状況論的観点から考察すること、写真による映像ナラティブ研究法を開拓すること、にある。研究期間内には、長期留学者の写真の活動場面、被写体の種類、その経年的変化に量的・質的分析を加え、写真に基づくインタビューの分析結果と総合し、比較ケーススタディとしてまとめ、国内外の学会で発表し、学術雑誌に論文を公刊した。また、映像ナラティブアプローチに関心を持つ海外の研究者たちとの共同プロジェクトを開始した。これを土台に国際的研究に発展させていきたい。

研究成果の概要(英文)：This study aims to understand second language identities from situated learning perspective through the analysis of photographs along with life-story interviews and generate insight into the use of photographs for narrative research. We analyzed activities and subjects appearing in the photographs of long-term study abroad learners along with their narratives. Through comparative case studies, we considered how learners' participation in target-language-mediated communities of practice affect their second language identity construction.

研究分野：応用言語学

キーワード：第二言語習得 アイデンティティ ライフストーリー 映像ナラティブ

1. 研究開始当初の背景

本研究では、留学中の第二言語習得経験の記述にあたり、学習者が日常的に撮影した大量の写真資料を映像ナラティブとして活用する新しいナラティブアプローチを試みる。21世紀も十数年を経て、パーソナルコンピュータや記憶媒体、ビューアー等の周辺機器の目覚ましい高速化、大容量化が進展し、一般の人々が費用を気にせず大量の写真撮影・保管することが可能となり、フィルム写真時代と比べて、日常生活における写真撮影の頻度や写真の活用法にも変化が見られる。近年、既に社会学等の分野でナラティブアプローチが盛んになり、調査対象者が撮影した写真や動画を用いたナラティブを映像ナラティブとして捉え、異なる種類の映像ナラティブを活用した革新的な研究方法への試みが芽生えつつある。Riessman, C. (2008) *Narrative Methods for the Human Sciences*. Thousand Oaks: Sage は、映像(visual images)は人間の日常生活の中心を成すものであり、人間の意味の伝達過程の真の理解に欠かせないデータであるとする。しかしながら、第二言語習得論では、言語的語りとしてのナラティブへの関心は近年高まりつつあるとはいえ、もっぱら語りの分析に焦点がおかれ、それ以外のデータの活用法の議論はいまだ未開発の部分が多いといわざるをえない。本研究では、より豊かで複合的なナラティブアプローチの開拓に向けた第一歩として、第二言語習得研究における写真データの活用を試みる。

留学中の第二言語習得については、1990年代の B. Freed らのアメリカ人留学生の一連の研究が有名であるが、留学前後の言語発達に主眼をおく数量的調査が中心であった。その後、C. Kinginger らが2000年代初めに、より質的な観点から一連の研究を行っている。しかし、Block, D. (2007) *Second language identities*. London/New York: Continuum.の指摘

する通り、従来の研究はもっぱら欧米圏での英語母語話者が中心であり、その他の多様な地域での留学経験を扱った研究は国際雑誌上数少ない。本研究では、日本語学習者の日本への留学経験を明らかにし、多様なコンテキストでの第二言語習得のあり方を浮き彫りにしたいと考える。

本研究で用いる理論的枠組みは、J. Lave と E. Wenger らの提唱する状況的学習理論である。これは、学習を「実践コミュニティ」による社会文化的実践への参加の観点で捉えるものである。同理論は社会学、教育学を始め、第二言語習得分野でも注目を集めている。特に、Norton Peirce の研究では、カナダの移民女性の英語習得の実態を探り、職場などで周辺化されている彼女らにとって、「文化的資本」である英語と接する機会がいかに制限されているかを描いた。また、目標言語の習得は、その社会的実践の中で培われるアイデンティティの問題と複雑に関連していることを浮き彫りにし、これに従来と異なる解釈を加えて明らかにしている。

本研究では、留学中の学習者に焦点を当て、映像ナラティブの手法を用いることによって、彼らが目標言語における社会的実践へのネットワークにアクセスする過程の詳細な記述を試みる。また、その過程を通して形成されるアイデンティティの問題をも取り上げ、状況的学習理論の枠組みから新たな分析を加え、状況的側面に光を当てた第二言語習得理論構築に向けての一歩としたい。

2. 研究の目的

本研究期間内には特に次の3点に焦点を当てて研究を行う。留学中の第二言語学習者は教室外で実践コミュニティへいかにアクセスしていくか、第二言語学習者は第二言語を通じた実践コミュニティへの参加のし方をどのように発達させていくか、実践コミュニティへの参加を通じて留学

中の第二言語学習者の社会的アイデンティティはどのように変化していくか、である。また、同研究を通じて、映像データを活用した新たなナラティブアプローチの可能性についても方法論的観点から考察したい。

3. 研究の方法

日本の大学に留学中の外国人留学生を対象に、主に次のデータを収集した。全員を対象に、母語や日本語学習歴等の背景情報に加え、自身の留学中の第二言語習得の転換期に基づく区分を記してもらった。その上で、留学中の第二言語習得に関するライフストーリーデータを収集した。横断研究では74名の学習者のライフストーリー（インタビュー及び文章）を3年間に渡り収集し、データベース化して分析を行った。さらに、写真資料を活用したケーススタディを行った。ライフストーリーインタビューを実施した学習者の中から日常的に大量の写真を撮っている者に調査を依頼し、2名の協力者が得られた。4～9年の長期留学中に撮影した写真データを対象に、写真に表れる活動場面、被写体の種類、その経年的変化に量的・分析を加えた。その結果とインタビューデータの分析結果を総合し、ケーススタディとしてまとめた。

4. 研究成果

ライフストーリーデータの分析では、まず、学習者自身が作成したライフストーリープロフィールの区分に基づき、留学中の第二言語習得段階のパターンを探った。その上で、彼らが留学中にアクセスする実践コミュニティの種類とアクセスの方法を洗い出した。また、各自の参加を通じた変化を経年的に考察した。結果として、日本に留学中の留学生は日本語を介した実践コミュニティへのアクセスが容易でないこと、また、種々の方略を用いてアルバイトを含む多様な実践コミュ

ニティにアクセスを試みていることが明らかになった。さらに、ライフストーリーデータベーステキストのテーマ分析の結果から留学前と留学中のアイデンティティ、学習ストラテジー、学習ビリーフの変化も明らかになった。

写真資料を活用したケーススタディでは、日本語を介した実践コミュニティへのアクセスに成功したケースと、母語を介した実践コミュニティに留まったケースの比較を通じて、アイデンティティ構築における実践コミュニティの役割を考察した。以上の考察を通じて、日本語を介した実践コミュニティへの参加が日本語使用者としてのアイデンティティ構築に重要な役割を果たすことが明らかになった。ケーススタディの分析は、オーストラリアの大学の研究者と共同で行い、その成果をまとめて国際雑誌に論文を公刊した。同論文では、写真データの分析方法、及び、写真データと言語的ナラティブを総合した分析の方法についても考察している。これを土台として、映像ナラティブアプローチに関心を持つ海外の研究者たちと共同で書籍の出版計画を作成し、海外の出版社に投稿、採択をいただいた。本研究の成果を土台として今後国際的研究に発展させていきたい。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕(6件)

- 1) 鈴木綾乃、海野多枝 (2014) 「第二言語習得研究に向けた学習者コーパスの開発 『日本語学習者言語コーパス』の開発事例」『外国語教育研究』第17号 pp.1-19. (査読有)
- 2) 今井新悟、海野多枝、磯村一弘、篠崎大司 (2014) 「日本語教育における映像系大規模eラーニングのあり方 - 3サイトの比較から見る現状と課題 - 『日本語教育学会秋季大会予稿集』」 pp.31-42 (査読有)

3) 高橋亘、海野多枝(2016)「第二言語学習における授業外多読活動の可能性 日本語多読セッション参加者へのインタビュー調査を中心に」『外国語教育研究』第 21 号 pp.85-100. (査読有)

4) Takahashi, W. and Umino, T. (2016) ‘Out-of-Class Extensive Reading in Japanese as A Second Language: Enhancing Learner Autonomy Beyond the Classroom’ *CLaSIC 2016 Proceedings* pp.330-345. (査読有)

5) Umino, T. and Benson, P. (2016) ‘Community of Practice in Study Abroad: A Four-Year Study of an Indonesian Student's Experience in Japan’ *The Modern Language Journal* Vol.100/ 04 pp. 757-774. (査読有)

6)ハリ・ステアワン、海野多枝 (2016)「インドネシア語を母語とする初級日本語学習者の「-テイル形」の習得に関する一考察 「動作の持続」と「結果の状態」を中心に」 2016年日本語教育国際研究大会、バリ・インドネシア (pp.1-6)(査読有)

〔学会発表〕(計4件)

1) 今井新悟、海野多枝、磯村一弘、篠崎大司(2014)「日本語教育における映像系大規模 eラーニングのあり方 - 3 サイトの比較から見る現状と課題 -」2014年10月11日 日本語教育学会秋季大会(査読有)

2)高橋亘・海野多枝 (2015)「第二言語教育における授業外多読活動の可能性：日本語多読セッション参加者へのインタビュー調査を中心に」外国語教育学会(査読有) 第19回大会 (於東京外国語大学) 2015年11月29日

3) ハリ・ステアワン、海野多枝(2016)「インドネシア語を母語とする初級日本語学習者の「-テイル形」の習得に関する一考察 「動作の持続」と「結果の状態」を中心に」2016年日本語教育国際研究大会、バリ・インドネシア 2016年9月10日(査読有)

4) Takahashi, W. and Umino, T. (2016)

‘Out-of-Class Extensive Reading In Japanese As A Second Language: Enhancing Learner Autonomy Beyond The Classroom’, *CLaSIC 2016 National University of Singapore*, 2016年12月1日(査読有)

〔図書〕(計1件)

1) 海野多枝(2014)「日本語教育におけるコミュニケーション型授業の試み」(pp.72-75) 上智大学 CLT プロジェクト(編)『コミュニケーション型英語教育を考える 日本の教育現場に役立つ理論と実践』アルク

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

海野 多枝 (Umino, Tae)

東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授

研究者番号：00251562

(2)研究分担者

()
研究者番号：

(3)連携研究者

()
研究者番号：

(4)研究協力者

()